

子規と義太夫

神楽岡 幼子

子規と謡や子規と寄席については先行研究があり、子規と歌舞伎については、先に拙稿で述べた。子規と義太夫についてはどうかというと、寄席での女義太夫との関わりを除くと、これまでほとんど触れられることはなかったようである。しかし、義太夫は子規にとって同時代の芸能文化として、常に身近な存在であった。厳密に分類できるものではないが、以下、芸能文化として寄席などを通して触れていた義太夫の世界、読み物として触れていた義太夫の世界、研究・批評の対象としての義太夫の世界の三つの切り口から、子規と義太夫の関わりようについて、見ていくこととする。

一、芸能文化として

子規にとって身近な義太夫はやはり女義太夫の世界であった。

「筆まかせ」には、次にあげるように、かなり詳しい評判が見える。

女義太夫は□（一字分空白）勝を始めて聞きしが、其時は寺子屋の段にて、彼の松王丸の笑ひを聞き、いたく感心せり。されど其人柄よからねば、これも好まず。此間東玉を聞きしが、これも意地わるき見えあり。丁度帯屋の段なりしかば、意地わるき廻うつりて面白かりし、その熟練の廻は感服の外なし（明治二十二年）

「□勝」は竹本此勝あるいは竹本照勝が候補である。明治二十四年の女義太夫の相撲見立番付が残るが、この中で「勝」のつくのは「此勝」と「照勝」の二人で、「此勝」は中央の行司の位置に名前が載る女義太夫であるが、「照勝」はまだ東の十四枚目という位置ではない。ただし、照勝について明治二十四年刊『東都芸苑女義太夫名花評判記』（芳州情史編、東京堂）「附録」

には「此人。芸道に於ては中々巧者にして。能く低声をして自在に回はず。技倆感服と言ふの外なし。只客受の悪しきは是非もなき次第なり」と記されている。此勝については矢野挿雲が

「当時の娘義太夫で、此勝という渋皮の剥けたのを、勤番者の堂摺連がつけまわした」と述べているように、当時、人気の女義太夫であった。子規が聞いたのは寺子屋であったというが、「彼の松王丸の笑ひを聞き いたく感心せり」と評されたところを見ると、芸は悪くなかつたようである。しかし、「されど其人柄よからねば、これも好まず」とあるように、子規の好みには合わない女義太夫であつたらしい。

今一人、名前のあがる「東玉」は竹本東玉のこと。明治十八年に大阪から東京に移つてきたが、竹本京枝とともに女義太夫界のトップスターであつた。「女義太夫芸評」(明治二十四年刊、旭峯居士、傘の台主人共評、博盛堂)というもう一冊の女義太夫の評判記をみると、東玉はそのトップにあげられ、次のように評されている。

履歴より云へは。本場の種を東京に蒔附けし開祖。技芸より云へばしん打たるもの、師表にして。晴天男義太夫中の錚々たる者にも。毫も譲らざる老練家といふも。決して過言にはあらざるべし。(略)評者が聴て尤も感服せし語物は

日向島。及おはん長右衛門帯屋の段。花川戸長兵衛内の段。等なり

「女義太夫芸評」では「帯屋の段」が評価されているが、子規が楽しんだ東玉はその得意とする出し物であつた。子規も「丁度帯屋の段なりしかば 意地わるき処うつりて面白かりし、その熟練の処は感服の外なし」と芸の熟練の程は認めている。しかし、「意地わるき見えあり」と好まぬ風体をまず言い、芸についても「意地わるき処うつりて面白かりし」というのだから、子規の女義太夫に対する評価のポイントが芸のよしあしだけでなく、見た目から受ける印象のよしあしにもあつたことがうかがえよう。

さて「女義太夫芸評」には「鶴沢鶴蝶」の評も載るが、鶴蝶は子規と漱石の書簡のやりとりで名前の挙がる女義太夫である。まず、「女義太夫芸評」の鶴蝶評を見てみよう。

腕前は流石に堅たく。中に八同丈を一本調子なりなど云ふものあれど。黒人にハ受けよく。凡て男太夫の風にて仲々貫目あり。

東玉や此勝に較べると少し評価はさがるが、東京出身の太夫として、女人受けの良い、頼もしい印象のある太夫であつたという。では、漱石と子規はこの太夫をどのように見たのか。次

に女義太夫について言及のある漱石宛書簡を「筆まかせ」からあげよう。

一日神田の小川亭と申にて鶴蝶と申女義太夫を聞き 女子にてもかゝる掘り出し物あるやと愚兄と共に大感心 そこで愚兄余に云ふ様「芸がよいと顔までよく見える」と其当否は君の御批判を願ひます（明治二十三年）

これに対する子規の返信は以下の通り。

女義太夫鶴蝶とか余程絶伎之由（尤山川よりは一段下るべくと存候）おまけに絶品とか別品とか申事、四国仙人千里外より垂涎、久米仙人宜敷といふ姿に御坐候 大兄の御眼鏡なればよもや違ひはあるまじく御熱心の程は小川亭迄御出張の一事にても奉推察候 芸と顔とは concomitant variation をなすや否やとの御下問、名前通りの野暮流に如何でか分り申べき、さりながら一事の御注意可申事の候 所は外ならず芸がよいから顔がよいのか、顔がよいから芸がよいのか、原因と結果とを御間違へ被成ぬ様奉願候（明治二十三年一月十八日）

女義太夫の写真も残る時代であるが、残念ながら鶴蝶の写真は未見のため、その面影はわからない。「女子にてもかゝる掘り出し物あるや」との評は、「女義太夫芸評」に「凡て男太夫の風

にて仲々貫目あり」と評された鶴蝶の姿と等しいものであろう。「芸がよいから顔がよいのか、顔がよいから芸がよいのか」のこのばからも推し置れるように、当時の女義太夫の人氣は芸だけではなく、器量のよしあしが重要であつた。子規が明治二十五年に執筆した小説「月の都」においても、最近のちまたの噂話をする局面に「芸をぬきにしたる女義太夫の評判とりく」にと、その芸よりも女義太夫自身の話題に盛り上がるさまが描かれている。先にも引いたが、女義太夫評判記「女義太夫芸評」や「東都芸苑女義太夫名花評判記」が刊行されるなど、女義太夫は明治二十年頃から非常な勢いをもつて人氣の芸能として楽しまれていた。ちなみに、「東都芸苑女義太夫名花評判記」は子規も所蔵していた一冊で、現在は法政大学図書館子規文庫に収められている。

「筆まかせ」に「当年の正月は（略）寄席へは五六回程参り」（明治二十三年）とあり、また、「余は此頃井林氏と共に寄席に遊ぶことしげく 寄席は白梅亭か立花亭を常とす」（明治十九年）とあるように子規は寄席通いを好んでいた。柳原極堂も子規の寄席通いについて「子規の「下宿がへ」に就て」（同人）の中で次のように述べている。

居士は白梅亭、立花亭を文中に挙げてゐるが 他に近くに

小川亭といふものもあり 時には本郷の若竹亭に遠征を試みしこともあった。演芸は普通落語、講談、流行唄をはじめ、女義太夫、娘手踊などで義太夫、手踊の類は常に学生の人気を集中していゐた。

「女義太夫芸評」「義太夫定席一覧表」によると、小川亭は一年中義太夫のみの正席、若竹亭、立花亭は時々色物も出すことのある准席であつたというが、子規の寄席通いの楽しみの一つが女義太夫であつたことは確かであろう。

寄席では落語家の義太夫を聞く機会もあつたのであろうか、「筆まかせ」には次のような発言も見える。

○落語運相撲 (略)

左 宮濱

右 勝美

(略) 右可なりの義太夫也 (明治二十二年)

また、子規は「文界八つあたり」(明治二十六年)において「世の所謂義太夫語り (又は浄瑠璃語) とて寄席杯に興行するもの是れなり」といい、「戯曲類と四季」(明治二十九年)において「寄席に於ける義太夫の語り物の如き 即ち是なり」という。これらのことばからも子規にとつて寄席で聞く義太夫は非常に馴染み深いものであつたことが確認できるだろう。

次に挙げる「筆まかせ」の記事からも子規が日常の中で、早くから義太夫を楽しんでいたことがうかがえる。

余八犬伝を好む 始めの方にては富士の段尤も気に入りた

り (略) 浄瑠璃にても此段を聞く時は覚えず笑顔をなすを

常とす (明治十八年)

東京の寄席で聞いたものか、松山時代に耳にしたものか、あるいはその両方なのか不明ながら、浄瑠璃の「八犬伝」を聞く機会があり、しかも「覚えず笑顔をなす」というのであるから、それを心から楽しく思っていた様子が感じられよう。明治二十九年「戯曲類と四季」で子規は「巢林子以後百余年間の戯曲中有名なる者 (即ち現時多くは田舎芝居及び義太夫に其命脈を繋ぎたる者)」とするように、子規にとつて馴染みのものは田舎芝居であり、義太夫であつた。

義太夫といつても、劇場や寄席で楽しむだけではない。明治三十年の「曼珠沙華」では鎮守祭りの風景として「若い者は獅子舞の太鼓の稽古をする、年寄は浄瑠璃の下ざらへ」云々の描写があるように、お祭りの余興としての素人浄瑠璃も子規にとつてまた身近なものであつた。

さらには、自ら浄瑠璃を語ることもあつたようで、「筆まかせ」には次のような記事も見える。

一昨年頃の事なりけん 余の下宿に友達集りて芸まはしとて順に都々逸 はやり歌 浄瑠璃など歌ひしことありしがはじめははづかしとて夜間火を点せずによりしが 数度の後やうくになれて其後は人の前にて歌ふともさまでははづかしくなき様になりたり (明治二十一年)

都々逸や流行歌と並んで浄瑠璃も芸廻しの出し物の一つであったことがわかるが、このように自らが義太夫を語って楽しむことも子規の日常の一コマであった。

大阪の義太夫にも興味があつたのか、碧梧桐からは松山に來た大阪浄瑠璃の話題が、虚子からは大阪で浄瑠璃を聞き損ねた話題が提供されている。

昨夜池田政忠氏と共に新榮座に大坂浄瑠璃をきく 重なるもの、三勝半七御園もどしの段、源氏布引 (トやら) 小桜 賣苦の段、甚た愉快を感じたりき 最一度行くつもり (略) 大阪浄瑠璃ハ三味も能く鳴り声も甚だ能く 座頭を越大夫 次を七五三大夫 次は大和大夫後四人あり (明治二十五年 九月十六日、碧梧桐子規宛書簡)

文楽座を襲ひしに興行休み中 大失望にて稲荷座を見舞ひしに夜興行との事 夫か為め全地に一泊もあまりと存じ又停車場に引かへし (明治二十八年七月二十九日、虚子子規

宛書簡)

明治二十三年に大阪に行ったときには彦六座の前の大谷是空の家に宿泊しているが、そのときには次のように述べ、その賑わいを書き留めている。

四日朝床の中にてめざめ、そこはかと見まはずに、(略) 前の彦六座にて人形芝居の興行中なればかしまじともかしまし。どう見ても臆病者のすむべき処にはあらざめり。(「しやくられの記」、明治二十三年)

ただし、この上阪時に文楽を見ることはなかつたのか、観劇の記録はない。本場の大阪に來たからには義太夫を楽しんで帰らねばというほどの熱意はなかつたということであろう。

「筆まかせ」には次のような一文も見える。

余ハ義太夫を知らず 随て義太夫を聞きに行きしことも少なし、いつか越路の中將姫雪貞を聞きしが 感ぜし処ハ「自在にして難滞の体なし」といふのみ、其妙処は知るを得ず (明治二十二年)

子規は「余ハ義太夫を知らず 随て義太夫を聞きに行きしことも少なし」といい、越路太夫についても「其妙処は知るを得ず」という。寄席通いを好んだ子規ではあるが、義太夫が一番の目当てではなかつたようである。ただ、これまでに見えてきた

ように、淨瑠璃に深く馴染んでいたことに疑いはない。越路太夫は明治十八年、明治二十年、明治二十三年と上京し、寄席に出勤、大いに評判をとっていたが、子規はいずれかるときに越路太夫を聞いたのであろうか。「つゞれの錦」(明治二十三年)には「いつもく越路のよせは大当り」の句も残されている。また、子規は明治二十八年八月九日付、虚子宛の書簡で次のように述べている。

貴兄によれば美を感じる瞬間の快樂は同様なりとか 小生一向解せず候 謡曲を見ても芝居を見ても舞踏を見てもカツボレを見ても貴兄ハ同様に感ぜらるゝにや 琴を聞きててもピアノを聞きてても越路の義太夫を聴きてても敦盛の笛をき、てもゲザのイヲリンを聞きてても同様に感ぜらるゝや
これ以外に越路太夫について子規が語ることはなく、そのほかの太夫についても発言することはなかったが、越路太夫の義太夫の価値を認識していたことは確認されよう。

晩年、病床にあつても子規の周辺はにぎやかで、多くの人が子規庵に集つた。次にあげるのは青木月斗「師走日記」に記された明治三十三年某日の子規庵での話題である。

鳴雪翁に四方太君などは、墨竹の掛軸がか、つて居る床の上に、雛様然と座を占められた、鳴雪翁直に「私が太夫で

四方太さんが三味線ひき、否私がさみで四方太さんが太夫、兎角年寄は遠慮して若い者に花を持たせる様に……ハ、ハ、」一座哄然として笑の海の浪は高くどつとよせた

人があふれたために、鳴雪と四方太は床(とこ)に座すことになつたが、そのありさまを床(ゆか)の太夫と三味線に見立ててのやりとりである。帰り道の鳴雪も芝居について饒舌に語つたようであるが、鳴雪は「蕪村句集譚義」においても芝居の知識や芝居好きからみた句の解釈を子規に披露している。

実際に子規庵において、義太夫の床が再現されたこともあつた。明治三十五年、虚子の企画で女義太夫を楽しむ会が子規庵で催されたのがそれである。伊藤左千夫「竹乃里人」(馬酔木第十二号、明治三十七年五月五日)によると次のような次第であつた。

たしか明治三十五年の春であつたと思ふ、追々と病体衰えてくるので、人々種々と慰藉の道を苦心して居る時であつた、予も夕刻かけて訪問すると、河東寒川の西君が居られて、けふは高浜が女義太夫を連れてくるから聞いてゆけとのことであつた、(略)太夫連は上り鼻の隣座敷で用意をやつてゐたらしく、床の正面に蒔絵の見台の紫半染の重々しひ房を両端に飾つてあるやつが運出された、跡から師匠の老婆

次に鳩羽色か何かの片衣つけた美人の太夫が出てきて席に就いた、此時予は先生の頭の後方に座して居つたので、先生が思はず拍手してゐるのが見えた（略）先生が物に興ずること、いつでもこんな調子である、二人の太夫の内一人は頗る美兒であつたと云へば、先生はランプの影に遮られて見えなく、それは残念であつたなど、大に笑つた、逆てもこれが半死の病人と思へようか、烈しく興味を感じては殆ど病を忘れて了ふのである

碧梧桐もこの一件に関して「ほととぎす」（第五巻第四号消息欄、明治三十五一月一日）に書き残している。

去十一日夜、虚子君の催しにて、子規君の希望もあり、同君宅に義太夫会を開かれ申候。義太夫会と申しても、ある年寄の女師匠が、その弟子を三人ばかり連れて参りしものに候ひしものに、根岸庵にて三味線の音がするなどは空前のこと、て、子規君も久し振り面白き思ひをしたりと、御満足の様子に見受け申候。左千夫君鼠骨君小生等も傍聴に出掛け、其他近所お隣り辺よりも傍聴者多く、一時三十名ばかりの人数打つどひ、昨年蕪村忌以来の賑やかさと相成申候。義太夫を聞かれし為め其痛苦を忘れられしには無之、義太夫の始まる前に令の散葉を服用せられたるにて候。魔

睡薬を飲まねば、義太夫の一段も聞かれぬといふこと、思へば悲痛の極みにて候。

碧梧桐によると今回の企画は「子規の希望」でもあつたといふ。虚子が子規のためにそれを企画したということも、やはり子規が義太夫を好むであろうことを知つていての選択であつたと思われる。虚子も義太夫を好んでいたことは、例えば竹本小土佐をモデルにしたという小説の一場面からも知られるところであろう。虚子は大いにはりきつたのであろう。複数人の女義太夫で、見台も堂々たるものが運び入れられている。女義太夫は肩衣をつけての語りであつたというから、まるで寄席の床が子規庵に出現したかのような風景であつたことであらう。左千夫や碧梧桐の記事からは、虚子の企画は大成功で、子規を大層、喜ばせたようであつた。

二、読みものとして

病床の浄瑠璃本や春の宵

右は子規の三十三歳のときの句である。現在、法政大学図書館子規文庫所蔵の子規の旧蔵書を見ると、武蔵屋叢書閣の近松本や「名作三十六佳撰」のシリーズから義太夫稽古本、「懐中浄

瑠璃音曲玉揃、「懐中義太夫時雨の炬燵」などの懐中本にいたるまで、種々の浄瑠璃関係の書籍が収められている。子規に就て義太夫は寄席で聞くだけのものではなく、読みものとしても楽しまれていた。明治二十五年、子規は虚子に「近松著世話物合本一冊」を送っているが、その時の虚子宛書簡には次のようである。

近松著世話物合本一冊御送申上候、御笑留被下候ハ、幸甚
 何か違ふ本を両君へ御送り可申存候得共 折柄書店に無
 之候故 別本一冊丈御送申 あとハ後便に托シ可申候 尤
 此本ハ御所持かも不存候へとも 外に恰好のものなき故如
 此（明治二十五年五月十七日）

これによると決して近松が特にお勧めの一冊であったというわけではないらしいが、虚子がすでに持っている書籍かもしれないといながらも、とりあえずの一冊として選んだのは近松であった。もちろん、近松以外にもよく読んでいる。

次にあげるのは明治二十八年八月九日、碧梧桐宛の子規の書簡である。

春木座に男児の涙ををしげもなく落して 今更阿波十に感
 心したまひし由 阿波十程のものは芝居でなくとも義太夫
 でも涙は落つべく 義太夫でなくとも書物で見ても涙は落

ち可申候 小生芝居を見た事もなく 此義太夫も余り聞た
 覚えはなけれど 倭文範の上には涙痕を留め申候 貴兄等
 は此浄瑠璃本御覽被成候事無之候哉 又御覽被成候とも御
 感じなかりしにや それで沙克斯比亞の近松のとは少々片
 腹いたく覚え申候

「阿波十」は「傾城阿波の鳴門」の「十郎兵衛内の段」のこと。春木座では七月の出し物が「阿波の鳴門」であった。子規は義太夫で聞いた経験がないわけではないが余り聞いたことがないといひ、芝居でもみたことはなかったという。しかし、「浄瑠璃本御覽被成候事無之候哉」とのことからは子規は浄瑠璃本でこの作品を読んでいたことがうかがえる。「義太夫でも涙は落つべく」とあるように、素浄瑠璃として語りを聞くだけでも涙がこぼれ、書物で読むだけでも涙がこぼれるというのである。「倭文範」は「懐中義太夫絵入倭文範」のこと。義太夫に涙した子規は明治三十四年「俳諧新旧派の異同」の中で、「芝居を見ても唯々其泣く事を面白いと思ふ、（略）芝居でも義太夫でも悲しい方が多い、悲し方が注意を曳く、（略）人間は楽みより悲みに同情し易い」と述べているように、義太夫の悲劇的な世界をその味わいと感じていたようである。

以上のように子規は義太夫で語られる世界を読みものとして

も楽しんでいた。子規にとつて義太夫を読むことも日常の義太夫との接し方であったのだ。明治二十三頃には「富士のよせ書」として、「百日曾我」や「曾我會稽山」「恋女房染文手綱」等の義太夫から富士を写した局面を抜き書きにするなどしており、ここからも義太夫を読み漁っていたであろうことがうかがえる。明治二十四年の頃には「かさねこと葉」を執筆。「ばらく」「ばたく」「とろく」などの重ねことは収集したもので、さまざまなジャンルから収集するが、近松作品からの収集も少なくない。表現としての興味も抱いたようで、「筆まかせ」（明治二十二年）には次のような一文もある。

朝顔日記のさわりの中に「逢坂の関路をあとにあふみ路やみのおはりさへ定めなく」とある程巧妙なるはなかるべし「生写朝顔日記」の「宿屋の段」に出てくる表現をとらえ、「巧妙」であるとほめるのだが、近江、美濃、尾張といった地名を踏まえた表現を楽しく思ったのであろう。

音曲としての興味もあつたようで、「筆まかせ」（明治二十一年）の中で「一学科の区域（略）三味線の如きに至ては其小別夥しく 義太夫、富元、清元、長唄、常盤津、一中、宮園、河東、の諸節より流行歌の節に至るまで」云々と、種々の音曲の一つとしても捉えている。明治三十五年の「病牀六尺」でも「義

太夫といふやつも上方から東京へ来るのが普通になつて居る。さうして東京の方を本として居るのは、常盤津清元の類である。（略）義太夫は是等の音曲のうちで尤も派手で尤も重々しいものである。」と述べ、音曲としての義太夫についても関心を示している。

聞いたり、語ったり、読んだり……とさまざまな形で浄瑠璃と接してきた子規は作品を作る上でも浄瑠璃からイメージを得ることがあつた。例えば、明治二十三年「銀世界（第一）」において幻灯に写し出されるのは浄瑠璃のイメージ世界であつた。「銀世界（第一）」では「浄瑠璃にいはせると「アレ雪明りに向ふが見える、鳥羽の繩手や伏見の里」とおいでなさるだらふ」と始まり、静御前、中條姫の雪貫め、鉢の木、忠臣蔵……と浄瑠璃世界でお馴染みの場面が続く。また「銀世界（第三）」では、雪中でここえる親子連れを「安達原三段目ノ雪ヨリ来ル」と、駕籠から降りての老人と息子による女の介抱を「又伊賀越岡崎ノ雪ノ趣モアリ」と、親である身を隠して嫁に対応する老人を「此一段ハ又恋飛脚新口村ノ雪況アリ」と鳴雪に評釈されているように、やはり浄瑠璃世界のイメージに影響されているようである。

明治三十三年には「芝居十句集」や「芝居廻巻」のように「芝

居」を素材に句や和歌を試みたものもある。芝居の登場人物をイメージに読んだ句や芝居を素材にした句、芝居を利用した文章も子規には種々みられるのだが、それら子規と芝居の関わりについては別稿に譲る。

三、研究・批評の対象として

「筆まかせ」(明治二十三年)において「能楽と演劇」として、謡曲と浄瑠璃の特質を比較したり、「病牀六尺」(明治三十五年)において、「能は大概一日に五番と極まつて居るが近松あたりの作に五段物が多いのは能の五番から来たのではあるまいか。」と述べるなど、子規は浄瑠璃という芸能の来歴や正体を見極めようとしていた。「戯曲類と四季」(明治二十九年)においては浄瑠璃の作品世界を四季で分類することを試みるが、近松の世話物は「半数(凡十篇)は夏季に属す」として、「其事実の夏季に起りし者多かりし故なるべし」と分析し、近松以後は冬季が多く、さらにはほとんどが「雪の場なり」と論じ、義太夫に冬季の作の多い理由を分析する。子規にとって義太夫は研究の対象でもあった。「余は演劇道の門外漢なり。況して褥中に在りて此稿を草す。参考書すら只座右三三十巻の戯曲に過ぎず。君子其

粗漏を咎めたまはずんば幸なり。」と謙遜するが、病床にあっても義太夫に関する興味は尽なかつたようである。

子規は「文界八つあたり」(明治二十六年)においても「余は演劇の事に通せず」としながらも近松から現代に至るまでの劇史を追って、以下のように述べている。

近松巢林子の戯曲が如何に普通の小説に類似せるかは之を一読せしもの、熟知する所なり。其弟子なる竹田出雲の作を見れば已に判然たる演劇の体裁を成して其小説に遠ざかる処、之を巢林子に比して啻に霄壤の差のみならざるなり。下りて鶴屋南北に至りては全く舞台上の活用をのみ、これ務めて文学臭味は一切之を脚本中より追放したるが如く、而して其傾向は益々一方に趨りて終に今日の所謂活劇となりしものなるべし。

このように子規は演劇の変化を捉える。子規は「近松の戯曲が舞台上に上る事少きにも拘らず叢書として盛んに坊間に行はる、は怪むに足らざるなり」と続けるが、義太夫や芝居を小説として捉えたときに近松は小説としても読めるが、近松以降のものは小説から離れたものであることを指摘する。子規にとって近松は小説として批評の対象に成りうる存在であった。一方、出雲作品を始めとする舞台や義太夫で身近な近松以降の浄瑠璃に

ついでには「知らず／＼文学と分離し近松等の浄瑠璃と疎遠になるにつれて其流行おくれの浄瑠璃は亦演劇を離れて一種特別の技術として其音節と楽譜とをのみ残すに到れり。世の所謂義太夫語り（又は浄瑠璃語）とて寄席杯に興行するもの是れなり。」と文学的価値の消失を指摘する、歌舞伎界の演劇改良運動についても一家言を有していた子規であるが、「文界八つあたり」において「今日有為の文学者は何にでも手を出す癖あるに演劇に限りて空しく之を桜痴百川の二老に委して其上汁をだに吸はんとせざるは何故ぞ」といい、「現に寄席に興行する語り物を目的として一段物の新作を作るも亦文学者の一事業にあらずや」というなど、演劇改良運動を推進した福地桜痴や百川こと依田学海以外の文学者への叱咤激励のことばを発している。義太夫の世界に対しても革新をねがったものであろう。

義太夫に関しては種々、考えるところがあつたのであろう。明治二十八年の「病床日記」を見ると次のようにある。

六月十七日（略）碧生と大に義太夫の事につき談話す

（七月）十日 雨 俳句小説義太夫等を論す

子規は晩年にいたるまで常に研究熱心であつた。「蕪村句集講義」（明治三十一年～明治三十六年）には「花す、きひと夜はなひけ武蔵坊」に対し、鳴雪が「御所桜」といふ浄瑠璃などにも

ある如く」と言つた発言に対し、「鳴雪翁等の解釈に賛成。御所桜といふ浄瑠璃は蕪村よりも前に出来たものではないが斯様な伝説は古くからあつたものであらう」と言うなど、義太夫に対しての知識も豊富であつたようである。

明治三十三年十一月十三日の「病牀読書日記」には「昨夜眠られず。朝、寒暖計五十五度。晴。声曲類纂を読む。」として、「声曲類纂」を眺めながらの観察を書き連ねている。「声曲類纂」は明治二十三年九月八日に購入したもので、「筆まかせ」に「これより四谷街に出づ 書肆に入り声曲類纂を購ふて帰る」と記録されているが、愛読書の一つであつたようである。史料として「声曲類纂」を活用することもあり、例えば、「蕪村句集講義」にも、「絵図のそれも清十郎にお夏かな」の解釈をめぐつて、お夏清十郎の芝居についての情報を「声曲類纂」に求めたり、明治三十二年の「随問随答」において、資料として「声曲類纂」を提示したりしている。このように、研究、批評の対象として義太夫と接することもまた子規の日々の楽しみであつたのである。

そのような子規の義太夫に関する発言としてよく知られているのは「松蘿玉液」に記された近松への評価であろう。もちろん、「松蘿玉液」以外にも子規の近松に対する発言は散見する。

明治二十四年十二月三十一日の虚子宛書簡や明治二十六年の「文学雜誌」に見られるように近松とシェークスピアとを比較することもあったが、近松は元禄文学の代表者として西鶴、芭蕉と並べて語られることが多いようである。明治二十三年十一月上旬には藤野潔宛に次のような書簡を残している。

馬琴を読めは馬琴にほれ 春水を読めは春水にほれ 西鶴
門左衛門を読めは元禄文にうつ、をぬかし 源氏を読めは
中古の文体をしたふ

明治二十八年の「芭蕉雜誌」には「近年に至りて元禄文学なる新熟語出来たり」として、やはり「三偉人」に言及し、「三人共に従来の荒唐無稽なる空想と質素冗長なる古文との範圍外に出でて實際の人情を写し平民的の俗語を用ゐたることなり。」といい、同時代の文学者として並列の評価をするが、「三偉人の内近松は世に出づる時稍々後れたり。」と、活躍した時代の違いも意識していた。「芭蕉雜誌」に示された子規の近松の評価は次の通り。

菓林子も亦一種の演劇を創開せり。能楽の古雅以て普通一般の好尚に適する能はず、金平本の脚色釋氣多くして永く世人の耳目を楽ましむるに足らず。乃ち彼と此とを折衷し敏贈流暢の文字を以て世間の状態人生の熱情を写し之を俛

儡に託したり。錯雜なる宇宙の粉本を作りて舞台の上に活動せしめたる者実に是れ近松の功なり。

ここでは、新しい時代の文芸として、近松が切り開いた世界を積極的に評価している。ところが、翌明治二十九年には「松蘿玉液」が書かれ、近松批判が展開されるのである。「松蘿玉液」においては、「人間觀察」という点で源氏物語以来の文学者であると近松を評価し、「彼は文学史の上に偉大なる功蹟を残せり。」と文学史上の功績もまずは高く評価するのだが、「然れども近松門左衛門は元禄の文傑にして千古の文傑に非るなり。見よ今日の標準を以て近松を評しなば、其能く非難を免る、者幾何ぞ。」として、「今日」から見れば、国姓爺を除き「演劇として幼稚」であるといい、「近松は世話物に於て当時の世態を尽したるが如しとはいへどもそは其時代の比較上に言ふべくして今日より觀れば実に狭小なる区域を出でざりりなり。」と手厳しく批評する。続いて、「近松の文章は如何。」と文章が批評の対象となり、「道行の文は殊に其拙なる者なり」等々と道行きの難を指摘するのである。しかし、このことは子規が近松と対峙し、その読み直しを試みた⁵ということを示しており貴重である。革新的な子規にとっては近松も乗り越えなければならぬ功績を残したひとりであったのだ。

以上、芸能文化として寄席などを通して触れていた義太夫の世界、読み物として触れていた義太夫の世界、研究・批評の対象としての義太夫の世界の三つの切り口から子規と義太夫とのあり方を見てきたが、同時代の芸能文化として、寄席で楽しむ女義太夫のみならず、日常の中に義太夫という文化があったことが確認されよう。その中で読み物として触れることの多かった近松作品に対する態度は文学としても評価しようとするものであった。一方、近松以降の義太夫は、文学としてのみならず、生きた芸能として子規の日常の中にあつたのである。

〔注〕

(1) 木佐貫洋「芭蕉、蕪村、子規の俳句と能」(『融合文化研究』一〇号、二〇〇二年九月)、木佐貫洋「子規の俳句と能」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』三〇号、二〇〇三年二月)、矢野誠「文人たちの寄席」(『文春文庫』二〇〇四年)など。

(2) 「子規と歌舞伎」(『子規会誌』一三二号、二〇一一年十月)

(3) 「江戸から東京へ」(四)(『中央公論社』昭和五十六年)

(4) 漱石と女義太夫の関わりや当時の女義太夫の事情については水野悠子「知られざる芸能史 娘義太夫」(中央公論社、

一九九八年)等に詳しい。

(5) 子規の近松評価の諸々の問題点については 竹下豊「子規の近松批判から浮かぶもの」(『演劇学』三十五号、一九九四年三月)に詳しい。

(かぐらおか ようこ)／愛媛大学准教授